世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

国木田独歩「武蔵野」と坂口安吾「木枯の酒倉から」の「武蔵野趣味」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山路, 敦史 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1403

国木田独歩「武蔵野」と坂口安吾「木枯の酒倉から」の「武蔵野趣味」

山路　敦史

Ⅰ　「武蔵野趣味」の元祖

国木田独歩の「武蔵野」（原題「今の武蔵野」、『国民之友』一八九八・一～二）は[1]、雑誌発表当時には反響が少なかったが、『武蔵野』に収録された際に高く評価された[2]。独歩の「武蔵野」を「武蔵野趣味」の「元祖」と指摘したのは、柳田国男である[3]。柳田が批判的に指摘する「武蔵野趣味」とは、一九一六年に文化人類学者の鳥居龍蔵らによって創設された武蔵野会（現、武蔵野文化協会）とその機関紙である『武蔵野』（一九一八～）の動向を指す。なお武蔵野文化協会は、二〇二〇年九月には『武蔵野事典』（雄山閣）を刊行している。柳田は「当節の頻りに研究々々と云ふ人たちが、さも〳〵東京の武蔵野と言はぬばかりに、此辺を中心にした江戸式の心持で話をすること」について、「そんなのは只武蔵野趣味と言ふが宜しい。武蔵野研究と云ふ事は是からの仕事である」と断じている。「今些し昔の心持になつて物を見ねばならぬ」と述べる柳田にしてみれば、独歩の「江戸式の心持」とそれに影響を受けた動きに物申したくなるわけで、「国木田氏が愛して居た村境の楢の木林なども、実は近世の人作であって、武蔵野の残影ではなかつたのである」と批判している。

確かにこの柳田の批判は、「趣味」に過ぎないことを「研究」と称している「武蔵野趣味」の横行に対して一定の力はあるといえる。しかし、柳田の批判が学術的には有効だったとしても、独歩の「武蔵野」は依然として「趣味」の領域で参照され続けるだろう。

武蔵野会の活動にしてみても、鳥居龍蔵が「本会の設立と雑誌発行の趣意」（『武蔵野』一九一八・七）において「本会は単に狭き一種の専門家の会合ではない、広く武蔵野を中心として各方面より研究的に、将た趣味的に之を究め味はんと欲するのであります、されば何人と云へども苟しくも武蔵野に興味と同

情ある者なれば来つて会員たる事が出来ます」と述べていたような鷹揚さに対して、柳田の学術的な批判は刺さらない。批判するならば、柳田自身が「さうして有名な話上手を以て、昔の事を愛する友人を感動させ、到頭みんなを散歩好きにしまつたのである」と書いたように、人々を「感動」させ、次々と「友人」を生み出していく独歩の「話上手」ではないだろうか。柳田が批判しきれなかった「武蔵野」の語り口の魅力を再検討したい。

独歩の「話上手」を「武蔵野」というテクストから具体的に考えるためには、西川貴子が指摘した「言文一致体の文章で「君」など、読者へ呼びかける形式がとられていたり、「自分」の文を読んだ友人の手紙を引用して説明する形式がとられていたりすること」に目を配る必要がある[4]。

最後には、独歩の「武蔵野」についての分析成果を坂口安吾のテクストと比較対照し、安吾における独歩の影響の程度を見極めておきたい。

Ⅱ 「同感の人」の作り方

「武蔵野」は「一」～「九」の節に分かれているが、「一」の「自分」が「武蔵野」を書こうとした動機と受け取ることのできる箇所から、早速「話上手」である。

兎も角、画や歌で計り想像して居る武蔵野を其俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ではあるまい。それほどの武蔵野が今は果していかゞであるか、自分は詳はしく此問に答へて自分を満足させたいとの望を起したことは実に一年前の事であつて、今は益々此望が大きくなつて来た。

さて此望が果して自分の力で達せられるゝであらうか。自分は出来ないとは言はぬ。容易でないと信じて居る、それ丈け自分は今の武蔵野に趣味を感じて居る。多分同感の人も少なからぬこと、思ふ。

「自分」の〈武蔵野〉への熱意が表明され、興味関心を同じくする者が存在することが前提とされている。「同感の人」が存在することを至極当然のように「自分」が語ることで、「同感の人」の存在をさりげなく設定している。「同感の人」の存在があるから「自分」は「武蔵野」を書けるのではなく、「武蔵野」というテクストが「自分」の「趣味」に「同感の人」を生み出していくのだ。「二」における後に『欺かざるの記』として刊行される「自分の日記」の引用も、「材料不足」と言いながら、〈武蔵野〉について語る際に活用できる「材料」を持っているということが、「自分」に〈武蔵野〉について語るに値する人物としての輪郭を付与する。

「武蔵野」は「一」～「五」と「六」～「九」という区分で『国民之友』に連載された。「武蔵野」では「自分」の友人についてたびたび言及されるが、とりわけ目を惹くのは、「七」の次の箇所だろう。

自分と一緒に小金井の堤を散歩した朋友は、今は判官になつて地方に行て居るが、自分の前号の文を読んで次の如くに書て送て来た。自分は便利のためにこれを此処に引用する必要を感ずる。――武蔵野は俗にいふ関八州の平野でもない。また道灌が傘の代りに山吹の花を貰ったといふ歴史的の原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武蔵野を有して居る。其限界は恰も国境または村境が山や川や、或は古跡や、色々のもので、定めらるゝやうに自ら定められたもので、其定めは次の色々の考から来る。

僕の武蔵野の範囲の中には東京がある。しかし之は無論省かなくてはならぬ、[…]

この「朋友」にはモデルがいるとされ、複数の説がある。[5]ただし、「自分の前号の文を読んで」意見を送ってきたとテクストに書き込まれたこと（だけ）が、「武蔵野」というテクストにとっては決定的に重要である。中島礼子は、「引用の手紙は、独歩の考えを表明したものとして読むことが必要なのだ」と述べている。[6]「同感の人」が存在することを自明のものと考える「自分」を語り手として設定したわけだから、今度はその「同感の人」が実際に存在したのだと表立って示すことで、「自分」の言い分に説得力が与えられるわけだ。

こうした観点にしたがえば、手紙内にある「君の一篇にも生活と自然とが密接して居るといふことが有り、また時々色々なものに出遇ふ面白味が描てあるが、いかにも左様だ」というこれまでの「一」～「五」への賛同が示されている箇所の重要性もわかるだろう。

しかもこの「朋友」は、わざわざ手紙を書いて寄越して「自分で限界を定めた一種の武蔵野を有して居る」と語るほどには、〈武蔵野〉に一家言ある人物である。ここでの「朋友」（の手紙）とは、そのような「同感の人」を具現化する重要な装置である。「朋友」自身も「家弟をつれて多摩川の方へ遠足したとき」に「処々に生活を点綴して居る趣味の面白いことを感じて話したことが有つた」とあるように「同感の人」を得ることによって〈武蔵野〉に「趣味」を見出していたこともその補強材料になるだろう。

この「朋友」は、「東京は必ず武蔵野から抹殺せねばならぬ。しかし其市の尽す処、即ち町外づれは必ず抹殺してはならぬ。僕が考には武蔵野の詩趣を描くには必ず此町外れを一の題目とせねばならぬと思ふ」と過激な発言をしているが、これを支えるのが、「例へば君が住はれた渋谷の道玄坂の近傍、目黒の行人坂、また君と僕と散歩した事の多い早稲田の鬼子母辺りの町、新宿、白金……」という具体的な地名を挙げた呼びかけである。これを具体的に理解できるのは「君」にあたる「自分」だけであるから、ともすればここでの〈武蔵野〉は、「自分」と「朋友」の二人だけの閉鎖的な空間でしかなくなってしまう。

そこで重要なのが、「武蔵野は俗にいふ関八州と平野でもない。また道灌が傘の代りに山吹の花を貰つたといふ歴史的の原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武蔵野を有して居る」と

いう形で地理的な区分とも歴史的な背景とも切り離して自分自身の〈武蔵野〉を持つ考え方である。「朋友」は、「多摩川はどうしても武蔵野の範囲にいれなければならぬ」とか「八王子は決して武蔵野には入れられない」などと、とにかく〈武蔵野〉について力強く断言することが多いが、〈武蔵野〉の定義を厳密化して議論を閉ざそうとしているわけではない。

東の半面は亀井戸辺より小松川へかけ木下川から堀切を包んで千住近傍へ到て止まる。この範囲は異論が有れば取除いても宜い。然し一種の趣味が有つて武蔵野に相違ない事は前に申した通りである。

「朋友」は〈武蔵野〉（の範囲）について議論の余地があることも示しており、異論反論を受け入れる寛容な姿勢を見せている。〈武蔵野〉へのこだわりを見せつつも、そこに新たな定義で介入する余地が確認されるところが、〈武蔵野〉に趣味を感じる人間の新規開拓につながるのではないだろうか。厳密な定義が行われたものは、その定義が一度崩れれば、そのもの自体も崩壊してしまう。しかし、あらかじめ異論反論を受け入れる余地を残しておけば、仮に異論反論が起こっても盛り上がるだけである。独歩の「武蔵野」とは異なる〈武蔵野〉が提出されたとしても、「武蔵野」の意義や価値が損なわれることはない。〈武蔵野〉を成立させているのは「趣味」という感覚的な次元であり、結局のところ〈武蔵野〉がどのようなものなのかの具体像がはっきりしないので、まったく異なる〈武蔵野〉像を提出されにくく、提出されたとしても、どことなくそれは既に独歩の「武蔵野」に書かれているような気さえしてしまうだろう。

独歩の影響圏の一つとして、河井酔茗「武蔵野の面影」（『街樹』一九一五、梁江堂書店・市田昇館）を確認してみよう。

以来私は武蔵野が好きになつた。独歩の「武蔵野」もよんでみた。なるほど武蔵野には相違ないが、むしろ手近な方で、郊外趣味といつた方が好い、雑木林の武蔵野を描いてゐる。私のいふ草の武蔵野とは多少趣が異つてゐる。

昨年であつた。これも武蔵野には趣味をおなじくする友人外島劉君と、一泊がけで武蔵野徒歩旅行に出かけた。入間川辺から秩父根をまはり、青梅へ出て帰つた。はじめてのこととて原野の数は多く跋渉しなかつた。只秩父の山際にあまり近いところは、かへつて武蔵野の面影を存してゐないことを確かめた。

想ふに武蔵野の面影を知らうとするには、昔、何の辺がおもに武蔵野と称されたか、それを知らねばならぬと、例の外島くんに託して調べてもらったことが、歴史、地理の各方面にわたり、材料は数冊のノートに埋まつた。

左にのせる「武蔵野の面影」は、実はこのノートを土台として私の考へを少々くはへたもので、[…]

独歩が〈武蔵野〉を描いていたことは認めつつ、それを「郊

外趣味」や「雑木林の武蔵野」と要約して、「草の武蔵野」と対照させ、「多少趣が異つてゐる」と主張している。「郊外趣味」も「雑木林の武蔵野」も間違ってはいないが、独歩の「武蔵野」の一面を捉えたものでしかない。河井のテクストが示しているのは、独歩とは異なる〈武蔵野〉を提出したければ、独歩の「武蔵野」を非常に狭く限定的に捉えるほかないということだ。

そしてこの河井のテクストでもやはり意味を持っているのは「趣味をおなじくする」という同士の存在である。独歩にしても河井にしても「武蔵野の面影」を考えようとする志向は同一であり、〈武蔵野〉に対する感性を共有する友人の言葉（手紙・ノート）を叩き台とする形式も共通している。河井に独歩の「武蔵野」を否定し切る意図まではなかっただろうが、「多少趣が異なつてゐる」と新たな〈武蔵野〉を提出しようとする姿勢が、独歩の「武蔵野」の影響圏にあることを物語っている。「郊外趣味」にしても、「武蔵野」には「郊外」という語が書き込まれているのは事実なので、樋口忠彦が述べたように「人々の郊外への関心を先取り」した「近代の郊外趣味の元祖でもあった」テクストとして捉えることもできてしまう[7]。

Ⅲ　仮想世界としての〈武蔵野〉

「五」の「武蔵野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある」は、有名な一節である。同じ「五」の終り近くでも「同じ路を引きかへして帰るは愚である。迷つた処が今の武蔵野に過ぎない。まさかに行暮れて困る事もあるまい。帰りも矢張り凡その方角をきめて、別な路を当てもなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美観をうる事がある」として、目的意識を捨てて「迷ふ」ことの意義が説かれている。

〈武蔵野〉に「迷ふ」ことの意義は、やはり「朋友」の手紙から見出されている。といっても、「五」の「自分の朋友が嘗て其郷里から寄せた手紙」の「朋友」は、「七」の「朋友」とは異なるモデルがいると考えられていて、これは柳田国男とする説が有力である[8]。「この手紙の引用も実際のものの引用であって、独歩の創作とは考えられない」としても[9]、テクストにおいては「朋友」と「自分」との連帯感から〈武蔵野〉が生成されていくことが重要だろう。

> 自分の朋友が嘗て其郷里から寄せた手紙の中に『此間も一人夕方に萱原を歩みて考へ申候、此野の中に縦横に通せる十数の径の上を何百年の昔より此かた朝の露さやけしといふては出で夕の雲花やかなりといふてはあこがれ何百人のあはれ知る人や逍遥しつらん相悪む人は相避けて異なる路をへだゝりて往き相愛する人は相合して同じ道を手に手とりつゝかへりつらん』との一節があった。野原の径を歩みては斯るいみじき想も起るならんが、武蔵野の路はこれとは異り、相逢はんとて往くとても逢ひそこね、相避けんとて歩むも林の回り角で突然出逢ふ事があらう。

「朋友」が述べる「此野の中に縦横に通せる十数の径」とは異なるものとして、「自分」は「武蔵野の路」の特色を述べ、それを人と人との出会いの偶然性に求めている。〈武蔵野〉をほかのものと区別し、その差異化に魅力を発見するという論法は右の箇所に限らないが、「突然出逢ふ事があらう」と述べているので、これは「自分」による仮定の話である。また、「朋友」の手紙の内容も、「此間も一人夕方に萱原を歩みて考へ」たことであり、「何百年の昔」に思いをはせたものにほかならなかった。つまり、「自分」が示した「武蔵野の路」の特色とは、テクストにある「想像」という言葉を借りるならば、「朋友」の「想像」した世界からさらに「想像」して仮定したものである。

〈武蔵野〉の「落葉林の美」は、ツルゲーネフ『猟人日記』の二葉亭四迷訳「あひゞき」を受容した上で「発見」されたものである。そのため、現実そのものを眺めたというよりも引用の織物としてのテクスト上に雑木林が配置されたものであり、純粋な意味での「風景の発見などではない」と捉えることもできる[10]。ただし、「あひゞき」といったテクストから示唆を受けて構築された眼差しから楢や櫟に「美」を「発見」したのであれば、そこに〈武蔵野〉に存在する楢や櫟といった要素は確実に存在している。それに比べて、人と人とが偶然性のなかに置かれる「武蔵野の路」が存在する武蔵野とは、「自分」による一種の仮想世界なのであり、それこそ狭義の自然主義といったものでは全然ない。「武蔵野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処に見るべく、感ずべき獲物がある」という名文は、現実の〈武蔵野〉ではなく「自分」によって構築された仮想の〈武蔵野〉について述べられたことなのである。

> 武蔵野の美はたゞ其縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことに由て始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此路をぶら〳〵歩て思ひつき次第に右し左すれば随処に吾等を満足さするものがある。これが実に又た、武蔵野第一の特色だらうと自分はしみ〴〵感じて居る。

仮想の〈武蔵野〉の春夏秋冬、朝昼晩、天候を問わず、あらゆる要素のどれかには「吾等」は「満足」することができ、それが〈武蔵野〉を「当もなく歩くこと」によって得られる「武蔵野の美」であると主張される。〈武蔵野〉の汲み尽くせない魅力を網羅的に語った箇所であると同時に、人が〈武蔵野〉にこれから感じ取るであろう魅力のすべてに「武蔵野」というテクストを紐づけてしまう。さらにここでは「吾等」という形で、「自分」と「自分」に「同感の人」とが一括りにされ、「自分」が「しみ〴〵感じて居る」というその感性を共有する連帯が出来上がっている。

「同じ路を引きかへして帰るは愚である」云々という叙述に至るまでには、ほとんど仮想世界であることが隠されていない。

されば君若し、一の小径を往き、忽ち三条に分る、処に出たなら困るに及ばない、君の杖を立て、其倒れた方に往き玉へ。或は其路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到て又た二つに分れたら、其小なる路を撰んで見玉へ。或は其路が君を妙な処に導く。これは林の奥の古い墓地で苔むす墓が四つ五つ並で其前に少し計りの空地があつて、其横の方に女郎花など咲て居ることもあらう。

若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はゞ、畑の真中に居る農夫にきゝ玉へ。農夫が四十人以上の人であつたら、大声をあげて尋ねて見玉へ、驚て此方を向き、大声で教えて呉れるだらう。若し少女であつたら近づいて小声できゝ玉へ。若し若者であつたら、帽を取て慇懃に問ひ玉へ。鷹揚に教えて呉れるだる。怒つてはならない、これが東京金材の若者の癖であるから。

石田仁志は、これらの叙述を「決してある特定の地域の農民の姿や路ではない。それらは一般化された「東京近在」の農村風景として語られている。その〝ありふれた〟日常性こそが場所性を希薄化した空間の表現なのである」と指摘している[11]。内田順文も「仮想上の武蔵野探索」とし、「読者はあたかも自分自身が武蔵野の地を散策しているかのような錯覚を覚えるかもしれない」と述べている[12]。これらの印象を実現するのが、「自分」や「朋友」の仮定法である。さらに右の引用箇所は、そうした仮想世界の共有を前提とする叙述である。木戸雄一は、「語りかける相手との感性を十分確信しているがゆえに、「玉へ」という命令形を使っている」と指摘している[13]。「玉へ」という表現が何度も叙述されていることによって、仮想世界としての〈武蔵野〉とそれを共有してくれる読み手の存在を信じ切っているという輪郭が「自分」に与えられるのである。

太宰治は「わが半生を語る」（『小説新潮』一巻三号、一九四七・一一）で「明治文壇では国木田独歩の短篇は非常にうまい」と評価していた。その理由は、読者をいかにテクストに巻き込むのかを志向した太宰ならではの観点から、独歩のテクストに宿る以上のような志向を読み取ったからではないだろうか。

Ⅳ　「武蔵野趣味」の連帯感

〈武蔵野〉を楽しむことができる人同士の連帯感は、「武蔵野趣味」に共感できること自体に価値を付与すれば、より強固になる。それが行われているのが、「六」である。

今より三年前の夏のことであつた。自分は或友と市中の寓居を出でゝ三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋といふ小さな橋がある、それを渡ると一軒の掛茶屋がある、此茶屋の婆さんが自分に向て、「今時分、何しに来たゞァ」と問ふた事があつた。

自分は友と顔見合せて笑て、「散歩に来たのよ、たゞ遊

びに来たのだ」と答へると、婆さんも笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、「桜は春咲くこと知ねえだね」と言つた。其処で自分は夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解るやうに話して見たが無駄であつた。東京の人は呑気だといふ一語で消されて仕了つた。

「武蔵野趣味」の価値を高めるには、その感性が共有できる者とできない者とを区別し、感性が共有できること自体に審美眼のような価値を与えることが手っ取り早い。「茶屋の婆さん」が「今時分、何しに来たゞァ」と尋ねてきたことは、「自分は友と顔見合せて笑て」という互いに感性を共有していることの確認のために大切なのだ。「武蔵野趣味」はあくまで「趣味」であって、本当にこの「武蔵野」に書かれているような〈武蔵野〉の楽しみ方が一般常識化してはならず、〈武蔵野〉の楽しみ方をわかっている人というような特別感が損なわれてはならないのである。

感性を共有できない者を「武蔵野趣味」の連帯感を高めるための外部として設定する場合、テクストの呼びかけ構造を活用することはできない。テクストとしては、「同感の人」の存在を確信して呼びかけることによって、「自分」の「武蔵野趣味」に説得力を与えてきたからだ。だから、テクスト内部に具体的な存在（「茶屋の婆さん」）として描く必要がある。「茶屋の婆さん」をそれこそ「馬鹿にした様」に扱うわけだが、テクストでは「茶屋の婆さん」の方が「馬鹿にした様な笑ひ方」をしてきてと書くことで、徹底的に「武蔵野趣味」に無理解な存在として描き切る。「話して見たが無駄であつた」とはコミュニケーション上は残念な結果かもしれないが、実際は安易に理解されない方がよく、「夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解るやうに」という箇所に透けて見える「武蔵野趣味」に浸ることの優越感が明確になることが重要なのだ。

テクストは、せっかく用意した仮想敵を決して無駄にはしない。「成程小金井は桜の名所、それで夏の盛に其堤をのこ〳〵歩くも余所目には愚かに見へるだろう、しかし其れは未だ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ人の話である」という箇所は、既成の概念で見慣れた「美」とは異なる「美」の主張として把握されてきた。たとえば、中島礼子は「紋切り型の手あかのついた名所古蹟ではなく、自己の発見した新しい小金井の魅力を描き、読者の固定観念にゆさぶりをかけようとした」として、「「武蔵野」で同時代の人びとに与えようとした衝撃は、既成の枠にとらわれず、見慣れたものや思い込みから解き放たれた柔かい感受性による自分なりの驚きの眼と耳をもつことへの誘いではなかったのか」と指摘している[14]。既成の概念からの逸脱を語るためには、既成の概念を明確化させる必要がある。「茶屋の婆さん」の存在は恰好の素材だったわけである。この場合、「余所目には愚かに見へる」ということは、知る人ぞ知る「夏の日の光」を魅力あるものとして提示するためには歓迎すべきこと以外ではない。

このように「武蔵野趣味」について「同感の人」を示すだけ

でなく、その感性の共有の外部（「茶屋の婆さん」）を設定することで逆説的に内部を固めてきた「武蔵野」であるが、「七」における「朋友」の手紙も、続く「八」で「自分」が強く賛同していることとセットで考える必要がある。「自分は以上の所説に少しの異存もない。殊に東京市の町外れを題目とせよとの注意は少しも頗る同意であつて、自分も兼ねて思ひ付て居た事である」とあるように、仮想世界としての〈武蔵野〉は言ってしまえば虚像であるわけだが、他者から賛同されることによってその存在が保証され、安定する。これが「同感の人」たちによって成立する「武蔵野趣味」の空間にほかならない。柳田国男は『地名の研究』（古今書院、一九三六）において、地名を「要するに二人以上の人の間に使用せらるる符号」と定義したが、〈武蔵野〉は曖昧で恣意的に語ることができるからこそ、その感性が共有されることが価値を帯びるのだ。

「同感の人」への呼びかけや仮想世界としての〈武蔵野〉は、最後の「九」において全面化する。

> 必ずしも道玄坂といはず、又白金といはず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ケ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を呼び起すも妙ではないか。なぜ斯様な場処が我等の感を惹くだらうか。自分は一言にして答へることが出来る。即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社会といふものゝ縮図でも見るやうな思をなさしむるからであらう。

「自分」が語る「一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処」とやらは、「必ずしも○○といはず」云々とつらつら書かれているようにどことははっきりせず、地理上の行政区画をはみ出していく。その場所は「頗る自分の詩興を呼び起すのも妙」と問いが設定され、それはすぐに「斯様な町外れの光景は何となく人をして社会といふものゝ縮図でも見るやうな思をなさしむるからであらう」という考察が披露されることで回収される。「自分」がそのように思っていることは結構だが、この箇所では「なぜ斯様な場処が我等の感を惹くだらうか」とあるようにさりげなく呼びかける読み手を「我等」という形で組み込み、「詩興を呼び起す」という感性の共有が前提とされている。ここでの「社会といふものゝ縮図」とは、これまでの林や鳥や風の音、水流などの具体的な事象とは異なって抽象的だが、それが以降で少しずつ具体化されていく以前に「同感」することは決定づけられている。

「九」が特異なのは、これから確認していくように仮想として設定された読み手への呼びかけが繰り返されつつも、〈武蔵野〉の語がまったく用いられていないことである。「社会といふものゝ縮図」は、「田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるやうな物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱

腹するやうな物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れて居さうに思はれるからであらう」と換言されるが、そのことによって具体的な把握が可能になったとはいえない。「更らに其特点を言へば」と付け加えられた「大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合つて、緩やかにうづを巻いて居るやうにも思はれる」（傍点原文）という箇所はよく参照されるが、「町外れ」であることはわかっても大きな視点であるがゆえにやはり抽象的であるのは否めず、その後の具体例を待つことになる。その具体例が次のように挙げられる。

見給へ、其処に片眼の犬が蹲て居る。此犬の名の通つて居る限りが即ち此町外れの領分である。

見給へ、其処に小さな料理屋がある。泣くのとも笑ふのとも分らぬ声を振立てゝわめく女の影法師が障子に映つて居る。外は夕闇がこめて、煙の臭とも土の臭ともわかち難き香が淀んで居る。大八車が二台三台と続て通る、其空車の轍の響が喧しく起りては絶え、絶えては起りして居る。

見給へ、鍛冶工の前に二頭の駄馬が立て居る其黒い影の横の方で二三人の男が何事をか密そ〳〵と話し合て居るのを。鉄蹄の真赤になつたのが鉄砧の上に置かれ、火花が夕闇を破て往来の中程まで飛んだ。話して居た人々がどつと何事をか笑つた。月が家並の後ろの高い樫の梢まで昇ると、向ふ片側の家根が白んで来た。

「見給へ」という呼びかけが三度繰り返されており、見るべき対象と示されるのは、「片眼の犬」や「小さな料理屋」、「鍛冶工の前」の「二頭の駄馬」から「火花」に至るまでとどれも微細なものである。最後には「蠅の群」が注目されるなど、とにかく微視的になっていく。「八」の後半で「地方に生長」した「自分」にとって、「初は武蔵野の流、多摩川を除いては、悉く濁て居るので甚だ不快な感を惹いたものであるが、だんだん慣れて見ると」云々と書かれていたこととも合わせて、もはや叙述の対象は「武蔵野の美」といったものには留まらず、何でもありである。「不快な感」という叙述にしたがって、「素晴らしい自然など武蔵野にはないんです」[15]と主張することもできるし、「六」の「暫くすると水上がまばゆく煌て来て、両側の林、堤上桜、あたかも雨後の春草のやうに鮮かに緑の光を放つて来る」という叙述を抜き出すなら、言葉の上では水が美しく表現されているのだから、「水のいのちの鼓動」[16]を受け取ることもできる。「八」の叙述では「慣れて見ると」とあるので、結局はどちらの叙述も水の美しさに行き着くという見方もできる。

「今の武蔵野は林である、林は実に今の武蔵野の特色といつても宜い」（三）などを、〈武蔵野〉の核心をコンパクトに提示してくれるようなアフォリズムとして読まない場合、このテクストでは〈武蔵野〉を構成する風景や音などは良くも悪くも捉えられるようにできている。それが相反することのないよう様々な矛盾を矛盾のままに肯定できるような「社会といふも

の、縮図」を最後に用意していた「武蔵野」というテクストでは、最終的にはそこがどこであるのか具体的な呼び名だけがはっきりしない叙述が出現する。テクストは最後に一連の叙述を〈武蔵野〉として自発的に捉える視点を読み手に要請し、それが果たされることによってテクストと「同感の人」とのあいだに〈武蔵野〉を出現させようとしているようだ。〈武蔵野〉とは、感性の共有の上で初めて実体化を果たすものとして位置づけられているのだ。

この「九」は、「町はづれ（国木田独歩）」と題して、『文章世界』一巻一〇号（一九〇六・一二）の「文範」欄に掲載され、文章の手本とされた。その付記に「武蔵野を描かんとして、市街と田野との間なる町外れに着目したる、既に尋常の才にあらざるを知る。而してこれを描くに飽まで実写を以てしたる、いよ〳〵趣味あり。料理屋も面白く、大八車も面白く鍛冶匠の家、野菜市も面白く、午砲の微かに聞ゆるも面白し」とあるように、「同感の人」を作り出すことには成功したようである。

V 「木枯の酒倉から」の先行テクスト「武蔵野」

ここまで確認してきた独歩の「武蔵野」の特徴からは、その後継テクストとして安吾の「木枯の酒倉から」（『言葉』創刊号、一九三一・一）を考えることができる[17]。

「木枯の酒倉から」は「発端」と「蒼白なる狂人の独白」の章から成り、既に「発端」の展開については独歩の「武蔵野」と結びつけたところである[18]。すなわち、「今度武蔵野に居をトさう」としていた「僕」は「物覚えの悪い」ために「戻り道を混がらがせてしまつた」が、「根が無神経」なために「滅茶苦茶に歩き出した」ところ、「見はるかす武蔵野が真紅に焼ける夕暮れといふ時分に途方もなく気に入つた一つの村落を見つけ出した」という導入部分は、「武蔵野に歩く人は道に迷ふことを苦にしてはならない」や「同じ道を引きかへして帰るは愚である」、「別な路を当てもなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美観をうる事がある」という独歩の「武蔵野」の記述とそのまま連関しているのだ。

これに加えて、「木枯の酒倉から」の「発端」の章の「僕」が、「蒼白なる狂人の独白」の章では「君」という聴き手に回り、「余」あるいは「俺」（「発端」での「狂人」）の〈武蔵野〉についての語りを聴くという形態も、独歩の「武蔵野」の呼びかけ構造と近づけて考えることができるだろう。

さらに「狂人」は、自身が酒を痛飲してしまうことの責任を〈武蔵野〉という場所へ転嫁しているのだが、そこで語られる酒を痛飲せざるを得なくなる「木枯の武蔵野」とは、「狂人」の「詩的情緒の環」によって作られた虚像に過ぎない。こちらも独歩の「武蔵野」を横に置いてみると、どちらのテクストも〈武蔵野〉をある人物の仮想世界として提示していることが共通する。

だから「狂人」は、「君が見かけ程詩人なら、疑ふべき筋合ではないのぢやよ」という形で同じ「詩人」である聴き手「君」

へ共有を求める。さらには、「木枯の酒倉から」における「詩」とは、「詩はまた常に天を走れども地上の現実とは何等の聯絡を持つことをえなかつた」とあるように、「現実」とは切り離された虚像を語る言葉として定義されている。もしも共有されなければ一瞬にして崩れ去ってしまう空中楼閣として〈武蔵野〉が提示されている。「蒼白なる狂人の独白」の章に入る直前かつ「発端」の最後にある「次のやうな笑ふべき物語を語つてきかせたのです」とは、「僕」が「狂人」の語る〈武蔵野〉を楽しんだことを示す。「僕」が「狂人」の語る「木枯の武蔵野」を信じたのかどうかはわからない。しかし、「僕」は「今度武蔵野に居を卜さうと」考えた「武蔵野趣味」を持つ人物である。〈武蔵野〉についての話であれば、たとえ「現実」の〈武蔵野〉と一致していなかろうが、「僕」の思うのとは異なった〈武蔵野〉であろうが、問題なく「笑ふべき物語」として楽しむことができる。〈武蔵野〉に「趣味」を覚える感性さえ共有していればそこにある種の連帯感が生まれることを、「狂人」の一人よがりな〈武蔵野〉語りによって明確に表現し得たのである。

独歩の「武蔵野」に存在した「同感の人」の作り方や「君」などの二人称を活用した呼びかけ構造、〈武蔵野〉を定義しながら議論の余地も残すという鷹揚なイメージの提示、これら総じて「話上手」な側面を拡大してファルス（笑劇）化したテクストとして「木枯の酒倉から」を捉え直すことができるだろう。

さらには、「武蔵野」の「九」で示された「抱腹するやうな物語」の一例に数え上げることだってできるだろうし、「抱腹する」ところに異議があれば「田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるやうな物語」でもよいし、「哀れの深い物語」でもよいし、「小さな物語」には絶対当てはまる。結局のところ、多かれ少なかれ〈武蔵野〉に言及するテクストは、「武蔵野」に存在する諸要素のどこかには引っかかってしまうようにできている。

独歩の「武蔵野」の「八」において、「無論此二流のことは十分に書て見たい」としつつも、結局「後廻はし」にされたままの「多摩川」や「隅田川」によってテクストには未完結性が付与され、それは〈武蔵野〉の魅力が語り尽くせないことの表現となる。こうした見やすい要素も含めて、〈武蔵野〉は好きに語ってよく、そこに議論の余地があってもかまわないというともすればいい加減な定義を魅力あるものとして提示した叙述こそが「話上手」の実態ではないだろうか。それは、柳田の批判が決して及ばない、「武蔵野」が人々を惹きつける紛れもない魅力であった。

今回は、独歩の「武蔵野」の影響をわざわざ安吾のテクストと突き合わせることで、その聖典化を促進したかもしれない。しかし、独歩の「武蔵野」の語り口の魅力を具体的に分析し、その魅力を自覚し、その影響圏を確認していくことが、「武蔵野」の影響から自由になるためには不可欠だろう。

1　一九〇一年三月に民友社より刊行された『武蔵野』に表題作として収録された際に「武蔵野」と改題された。本稿での引用は、『定本国木田独歩全集』第二巻（増訂版、一九七八、学習研究社）に拠り、ルビは省略した。

2　一九〇一年五月の『帝国文学』に掲載された『武蔵野』評では、「筆者の尤も力を尽せるは劈頭の武蔵野らしく、実際、又これが一番読みごたえのある作なり」とある。また、『武蔵野』の装幀を手掛けた岡落葉は「独歩と『武蔵野』」（『書物展望』一一巻一二号、一九四一・一二）で、『武蔵野』が刊行されるまで「独歩は一般には少しも知られてゐなかつた」と回想している。

3　独歩と柳田の〈武蔵野〉観の比較については、拙論「柳田國男と〈武蔵野〉」（土屋忍編『武蔵野文化を学ぶ人のために』二〇一七、世界思想社）。

4　西川貴子「「風景」を見出す〈眼差し〉」（飯田祐子・日高佳紀・日比嘉高編『文字で考える〈日本〉とは何か』二〇〇七、双文社）、二九ページ。

5　前田重「峰夏樹――『暴風』のモデル今井忠治」（『国語と国文学』一九四八・五）によれば、この「朋友」は独歩の友人であり地方の半官であった今井忠治である。日本近代文学大系一〇巻『国木田独歩集』（一九七〇、角川書店）に注釈を付けた山田博光は、佐々城信子としている。新日本古典文学大系明治編二八巻『国木田独歩　宮崎湖処子』（二〇〇六、岩波書店）の「注釈」で、藤井淑禎は今井が一八九七年に今井は徳島に赴任したものの同年一〇月には京都に転勤していることから、「ここでは武蔵野を共に散策した信子と判事として地方に赴任した今井とを、一人の人物として合成していたことになる。そうすることで、武蔵野散策の印象は書きとめつつも、そこから信子の影を極力排除しようとしたというわけである」と述べている。

6　中島礼子「「武蔵野」――その構想と言文一致体の成立」（『国木田独歩――初期作品の世界』一九八八、明治書院）、二八二ページ。

7　樋口忠彦『郊外の風景――江戸から東京へ』（二〇〇〇、教育出版）、七三ページ。

8　「武蔵野」の「五」が、「武蔵野の路」として掲載された『文章世界』（一九〇七・四）の「文範」欄に添えられた付記を参照。付記の書き手は編集責任者である田山花袋と思われる。手紙の書き手が柳田であり、下総の布佐から送った手紙であるという指摘は、芦谷が前掲の注釈で指摘している。

9　芦谷信和「今の武蔵野」（『独歩文学の基調』一九八八、桜楓社）、二〇二ページ。

10　土屋忍「文学散歩論――文学研究者による観光・ツーリズムのために」（『昭和文学研究』第七五集、二〇一七・九）。

11　石田仁志「国木田独歩「武蔵野」論――都市と表現」（『論樹』第七号、一九九三・九）。

12　内田順文「風景としての武蔵野――国木田独歩『武蔵野』」（『国士舘大学地理学報告』第一六号、二〇〇八・三）。

13　木戸雄一「「青年」の連帯の失効――国木田独歩「おとづれ」と「青年」の手紙」（『大妻国文』第四八号、二〇一七・三）。

14　中島前掲書、二八二～二八三ページ。

15　土屋忍「今　身近な自然と私たち――国木田独歩の『武蔵野』から読みとく」（武蔵野の森を育てる会・武蔵野市教育委員会編『今　身近な自然と私たち――国木田独歩の『武蔵野』から読みとく』二〇一三、平成二四年度武蔵野市生涯学習事業プロポーザル委託「武蔵野市らしさを活かした生涯学習事業」報告書）。

16　前田愛「国木田独歩「武蔵野」――玉川上水」（『幻景の街――文学の都市を歩く』一九八六、小学館）、引用は岩波現代文庫版（二〇〇六）、七一ページ。

17　引用は、『坂口安吾全集』第一巻（一九九九、筑摩書房）に拠る。

18　以下の論述は、拙論を踏まえている。「坂口安吾の〈武蔵野〉―

―「木枯の酒倉から」を読む」（前掲『武蔵野文化を学ぶ人のために』）および「坂口安吾と〈武蔵野〉――「木枯の酒倉から」「竹藪の家」から「盗まれた手紙の話」「風と光と二十の私と」まで」（『坂口安吾研究』第四号、二〇一八・一二）。

＊本稿は、武蔵野大学二〇二〇年度学院特別研究費「武蔵野と近現代日本――国木田独歩はなぜ影響力を持ち得たのか」の成果の一部である。